

クニマスの保全及び養殖技術に関する研究（クニマス資源の動向）

とりまとめ:名倉 盾

2010年に西湖で再発見されたクニマスの保護と活用を図るため、現在までクニマスの保全及び養殖技術に関する研究に取り組んでいる。ここではクニマス保全の基礎知見となる資源量を推定し、その動向を評価したので報告する。

結果の概要

2021年秋の推定資源尾数は17,030尾（1歳以上、寿命6歳とした場合）となり、2012年の推定開始以降、過去最高だった2020年をさらに上回る値となった（図1）。2021年の資源量が増加した理由については、2018年に引き続き2019年に生まれたクニマス1歳魚の生残が良かったためと考えられた。その要因としては、2018年と同様に富士河口湖町の年間降水量が多かったことで、産卵場付近の湧水量が増加するなど産卵環境が良好だったことや、クニマス卵を捕食するヨーロッパウナギの出現数の減少、餌資源の改善等が複合的に関与していることが推察された。一方、2022年度の1人1時間当たりの平均釣果は下降していることから（図2）、2022年の資源量は減少する可能性があるが、近縁種のヒメマス同様資源変動が激しいことが予想されるため、今後も引き続き注視していく必要がある。

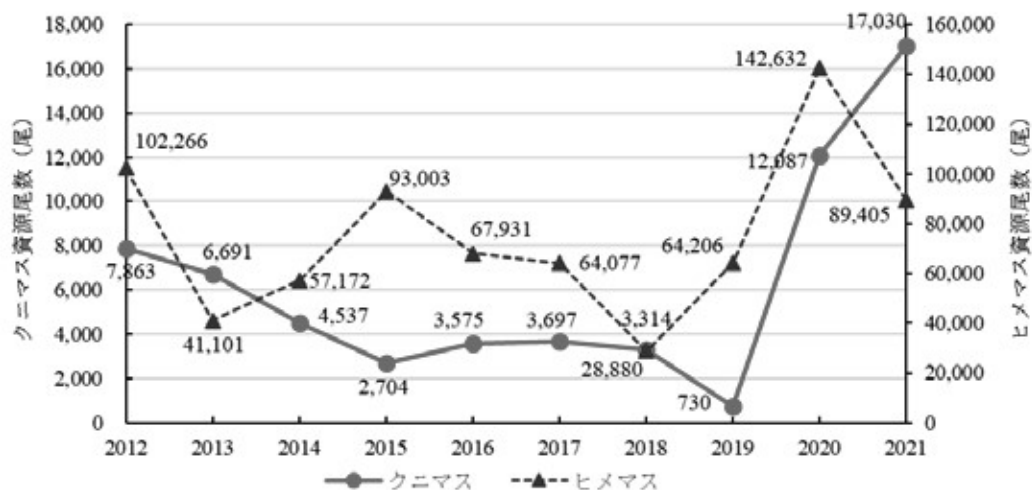


図1 西湖におけるクニマス及びヒメマスの推定資源尾数の変動（1歳以上、寿命6歳とした場合）

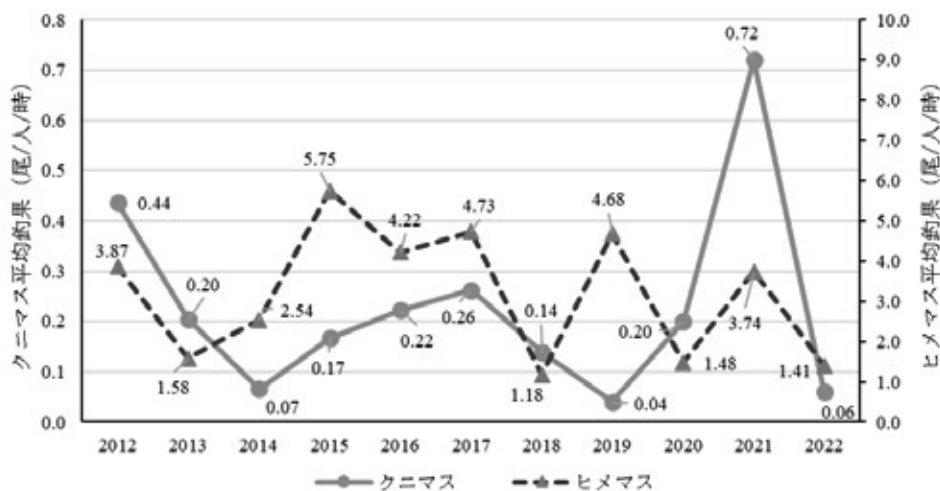


図2 試験採集時のクニマス及びヒメマスのCPUE（1人1時間当たりの平均釣果）